

古平の歴史

発行・古平町文化会館
古平町文化会館 42-12590
第165号・平成15年6月1日

年表で読む

古平の歴史

《71》

小学校教育

■小学校入学を奨励

明治三〇年代はまだ就学率が低く、特に女子については学校への関心が低かった。

当時から、町村の学校区域内に学務委員という職務があり、小学校に関する事について補助的な仕事をしていたが、就学を勧めるということが大きな任務でもあった。この学務委員といふ制度は戦後になつて廃止された。

■徒步で積丹へ修学旅行

明治三三年、高等科の生徒八〇人余りが、徒步で積丹郡余別村まで一泊三日の修学旅行をしたが、これは開校以来初めての修学旅行であった。

■教室増築と学級編成

明治三〇年、町内からの寄付を募つて校舎を増築したが、人口の増加や就学率が高まつたことなどから、さらに一教室(約二五坪)を九四五円余りで増築し、これによつて表のような学級編成になつた。

明治時代にも繁忙休業戦後間もない食糧事情の悪かった頃、自家菜園や鮫盛漁期には繁忙休業があつた。

明治のこの頃は例年のように鮫が豊漁で、ネコの手も借りたい忙しさに追われていた。漁の労働力として、家事の手伝いや子守など、児童も労働力として当然のよう駆り出された。

明治三五年頃、鮫漁期は四月には始まるため、学齢になつても子守のため就学しない児童が多く、また、仕事のために欠席

明治三〇年、町内からの寄付を募つて校舎を増築したが、人口の増加や就学率が高まつたことなどから、さらに一教室(約二五坪)を九四五円余りで増築し、これによつて表のような学級編成になつた。

◆ 小学校の学級編成と在籍生徒数

総 計	通 計 〔 高 等 科 〕	学校名		学 年	男	女	児童 数(入) 計
		古平小学校	尋常科 一~四年 計				
五三四	二五八	三七六	一五六	二四三	一四七	二三〇	四、煎餅喰競走 (尋常科男子)
一一八七	五一	一三六	九三六	二二一	一四四	一四五	五、育人牛引附 (尋常科女子)
八二二	二〇七	八一九	二四九	六九	四八	二〇九	六、障碍物競走 (高等科男子)

いつ頃から運動会が行われるようになったのかは不明だが、明治三五年六月一日、本陣の干場で行われた運動会の記録が

意味不明の種目もあるが、写真からは盛況ぶりがうかがえる。

■ 本陣の干場で運動会

あやしていた。登校競走(高等科男子)、旗取競走(高等科男子)、三角旗送(高等科男子)、余興来賓競走(高等科男子)、綱引(高等科男子)、十人引附(高等科女子)、五人引附(高等科女子)、三反字競走(高等科女子)、

する児童も増えた。そこで漁繁期には三週間の臨時休業で対処したが、なお就学率や出席率が悪かつたので、子守をしながら登校することを認めた。連れてきた幼児が泣いたりすると廊下で出たり、教室の後ろで幼児をあやしていた。

残っている。明治年間のものと思われる写真もあるが、プログラムを見ると午後の部)、

大正一年

▼五月二八日

朝のうち雲大で雨になるかと思つたが、また晴天になつた。こ
うもよく天氣も続くものだ。農園ではスイカ、アジウリのまき
つけをする。午後四時過ぎ、畑方面へ用事に行つたついでにススキナイの松林を見に行く。多く
は一丈^約ヌートル以上にも伸びていて、まずは順調なようだ。まだ
小さいものもあるが五、六年した
ら少しは林らしくなるだろう。六時過ぎ帰つたがまだ明るい。
①公園では別荘の建削をやつて
いる。

円程の入金があり、近頃では第一等だ。

▼五月三〇日

昨夜は蒸し暑かつた。今日も〇の一、二〇〇円を筆頭に合計二、一〇〇円余りの入金がある。今日は宵節句というので家ではマンジュウの馳走がある。明日は町会議員の選挙があるので運動が激しい。

▼五月三一日

今日は五月節句だ。昨日より蒸し暑かつたが、今晩四時頃からは町会議員の選挙があるので運動が激しい。

▼六月一日 起床六時半、昨日の雨も上がつて上天気になつた。熊さんや妻、それに外面の人たちが農園へ行つたが、リンゴも二、三日來の暑さで花盛りになつたとのこと。※巣虫が見えたというので取りに行く。店もボツボツ忙しくなつた。三〇〇余円の入金があり、不漁の割りには昨年よりかえつて成績が良いのが意外だが、商完には実に好都合だ。

で、今日は皆で巣虫取りだ。極力
征伐せねばならぬ。八時頃、入船
町今種田から電話で、掛け金を
取りに来てくれとのことで自転
車で行く。行つたら折悪しく小
網起こしに行き留守だつたの
で、一時間程待つたが、その間に
丸山岬辺りをぶらぶら散歩す
る。ずいぶんと景色がよろしい。
五〇余円を受け取り、帰途、三〇
に寄り話をし、一一時頃帰る。暖
かいこと夏の如し。七〇度(巽二
寒)まで上がる。

高野名幸作さんの日記から

〔66〕

に太る。リンゴ58号もポツポツ開く。12号、14号もつぼみがかなりふくらんだ。花付きは申し分ない。来月五日頃から一〇日頃には満開だろう。八重桜がきれいに咲いた。八時頃帰ったがいい運動になつた。気も清々する。熊さんが掛け取りに出かける。店の方も困の一、二〇〇余円を筆頭に外に四〇〇円程、掛け取りの分も入れて合計一二二〇〇日である。

ら大雨が降り出す。長らくの天気続きで、畠物も雨が欲しかつたのでよい雨だ。八時頃になると雨はますます強くなつた。今日は二級町議選挙当日だ。選挙戦は未曾有の激しい混戦模様になつてきた。五時頃同志会から投票以来の電話があつたりして、びっくりした者もいたとのこと。明日は一級議員の選挙の

六月三日

今日は店の方は閑散だった。父は畑の板倉の屋根のふき替えに行く。この頃 カムチャツカ方面へ出稼ぎに行く人が多くなった。四時頃農園へ行つて見たが、巣虫の多いのに驚く。リンゴの花は見事に咲いている。夜遅に行きいろいろと話をして一〇時半帰る。

▼六月二日

起床六時、すいぶんと日が長くなつた。熊さんは出面三人と巣虫取り、妻とコノさんも一〇時頃から行く。私は店番掛け金が二〇〇余円入る。天気も快晴で夏の如し。リンゴのためにには大変良い。リンゴの作も今年はどこも良いらしく、美國から二人リンゴの袋を買いに来たので、明日返答することにした。急速自転車で袋張りをしている張替屋へ行き、一万枚一円で張ることに決めた。支店農会田の畑を見ながら帰つたが、どこも花がきれいに咲いている。農園に寄つて見たが巣虫の多いのは驚く。皆で一生懸命に取つている。

▼六月五日

六時起床、雨が降り出したが久しぶりの雨で作物には良いだろう。熊さんは農園を休み掛け取りに新地方面へ行く。千円程の集金があり、今年は意外な程入金がよく何かと好都合だ。雨も午後二時頃になると晴れ上がり、大〇に行きリンゴの袋のことをついて聞くと、蛇名さんと十萬枚程売り物があるという。

安かつたので全部買うことにした。部落会の会合で原田さんへ行く。いろいろと協議し、のち役員改選をし、一時頃帰る。静かなよい夜だ、これだと明日も快晴ならん。

▼六月六日

起床五時、近頃では早起きだ。浜へ出て見る。それから農園へ行つたが朝露で畑の中はぬれている。ひと周りしたが巣虫は相変わらず多い。午前八時から、役場で巣虫駆除についての協議会があり、一〇余名が集まつた。

今年は一般に花の着き具合がよろしいとのこと。この分では巣虫を征伐すれば大丈夫だろうとのことだ。昼前に終わり帰る。午後銀行へ行き預け入れをする。

▼六月九日

天気快晴、このところ毎日のように巣虫征伐に追われている。私も朝早くからワラジがけで行く。虫も一日増しに大きくなり黒くなってきた。あと二、三日が大事だ、それまでに極力取つてしまわねばならぬ。一一時頃積丹から客があるとのことで店に戻る。巻網の道具を二五円程売る。昼食後、また農園へ行く。この分だと、明日一日で上の畑

落している。これもすいぶん沢山いる。ほかに青虫やらコフキ

幸い今日も上天氣で虫取りには好都合だ。あと一、二日この天氣が続ければ、虫もたいてい征伐することができるだろう。私も内閣改造問題で閣内不統一との批判を受け、六月六日総辞職したという。

▼六月八日

農園では巣虫征伐で一生懸命だ。今日も出面と合わせて一〇人が出てやつている。私も午後から行つて虫取りをしたが、実に近来にない程の沢山の虫だ。

天気の良いのが実に幸いだ。今年は花付きがいいので極力征伐せねばならぬ。

×

×

×

※巣虫＝日記では「巣虫」とか「スムシ」と書かれていましたが、余市農業改良普及所へ問い合わせたところ、それは「リンゴスガ」という力ではないかといふことでした。この力の幼虫はリンゴなど果樹の葉を食べて、果実の生育に悪影響を与えるほか、ときには枯らしてしまってしまわねばならぬ。一一時頃積丹から客があるとのことで店に戻る。巻網の道具を二五円程売る。昼食後、また農園へ行く。この分だと、明日一日で上の畑に転換してしまいました。

は終わるだろう。

▼六月一〇日

幸い今日も上天氣で虫取りには好都合だ。あと一、二日この天氣が続ければ、虫もたいてい征伐することができるだろう。私も虫取りに行く。一時頃昼食に帰り、後、銀行へ行き預金をする。帰途、三に寄り話をして一時頃帰り、また農園へ行く。昨日今日とすいぶん運動になつた。好天気が続いて夏のような暑さだ。六時に終わつて帰る。内閣組閣の大命が加藤友三郎に降る。

(続く)

想い出の一ページ

大澤文子

<4>

No. 165 い む か た せ

おそれながらわが町にもテレビジョンの普及が急速にたかり、都会並みの楽しさをもてる日々となつた。たしか昭和三十三、四年頃だつたろう。我が家ではひと足おくれの昭和三十年の秋に設置された。

誰しもが一日の仕事を終えわが家へ帰り着いた時、全国のニュース、そして娛樂番組……と瞳をこらし、くい入るようにテレビの前にくぎづけになつたのは無理もないことであつたろう。家々の窓からは音楽が流れ、町全体が楽しい雰囲気に包まれたものだつた。

また、その後全国的に種々の娯楽施設が出来はじめ、特に全盛時代と言われるようになつたろう。

私はその頃、仕事でよく旅行したものだが、列車の窓から見かけるのは競争するかのよう

に、高々と各地にボーリング場が建つていてことである。うらやましいと思ったこともあつたが、わが町でも昭和四十四、五年頃からポツポツ話が出はじめていたが、ようやく地方のある業者の計画で、昭和四十六年にボーリング場建設の運びとなつたのである。

沼江町の道路下の一角、わが

苺畑、野菜畑、毎年蓬もちを作るために摘みに行つて蓬草の野も一掃され、堂々とボーリング場が建設されたのである。町民の期待のもとに建設されたボーリング場だけに、もう手をあげて、その業者に感謝のまなこを向けたのは言うまでもない。

老若男女を問わず毎日のように足を運び、楽しみの歓声が絶えなかつたことを覚えている。

ご多分にもれず、わが家の夫も休日には必ず……と言つてもいい程通つたものである。私ども

もが札幌にいた若い頃には、よくスキーやテニスと二人で運動にはげんだものである。夫は運動不足でもあつたのであろう。この時とばかり、飽きもせぬせつせと会場へ足を運んだ。

冬になつて雪が山のように積もり、現在のようにブルドーザーもなく、新雪をこいでまで夫が、わが町でも昭和四十四、五年頃からポツポツ話が出はじめていたが、ようやく地方のある業者の計画で、昭和四十六年に

はボーリング場建設の運びとなつたのである。

特に沼江町民は会場が近いことでもあり、夕食後もいとわざ、嬉々として会場へ通つたものである。

沼江婦人会でも年間行事の一端として、昭和四十八年七月二十日にはボーリング大会を計画した。「組に別れ、日頃あまり出したこともない美声？」を張り上げ、それぞれに勝利の旗をあげ楽しい一日を過ごしたものだつた。

いつの日か、夫も勝利のトロフィーをもらい、わが家の居間に飾り、結んであつた朱いリボンの輝きを楽しんでいた日もあつた。

だが……いつの日かボーリン

グ熱も色あせ、全国的に閉鎖する個所もでてきた。そこかしこに建つていてボーリング場の塔も看板もはずされ、ボーリング場の文字を見ることも少なくなりつた。

何ごとも飛びつくのは早いが、直ちに消え去るのも早いのが世の習いであろうか。

わが町でも二、三年後には閉鎖するはめとなり、淋しさを感じたのは私だけではないだろう。

そんな儂さを感じたのも数か月だつたであろうか。その跡地に思いがけなく麺工場が出来、道行くたびに、ほのかな暖かい白い湯気が小窓からもれ、白衣エプロン姿の若い女性たちの出入りする様子に、心から喜びを感じたものだつた。その喜びもいつか消え、白い湯気、白衣エプロン姿の女性たちのかげも「想い出の一ページ」として残るのみとなつた。

あれから数年後は、子らの駆

る車の窓から想い出のよすがと

して、速度を落とし、ボーリング場の跡地を通り過ぎる「わた

天下公認の田舎つべ

富山市 高橋 藤藏

(元・稻倉石鉱業所勤務)

9

この春、上京した時の事。

東京は丁度、桜の花の見頃時

だつたので、東京駅は花見客で

いっぱいだった。

何回上京しても、出口や改札

口の方角が、とんと頭に残つて

いない『惚け』と『田舎つべ』

の慢性合併症の私は、人混みを

搔き分けながらようやく外に出

る事が出来た。

外は生憎の雨だった。ホッと

して、いた私に一人の老人が寄つ

てきて、

「ちょっと田那さん。傘を持つ

ていますか」

年の頃は八十歳過ぎ、赤ら顔

の小太りで、恵比寿さんが一度

も笑つたような福よかなお顔の

好々爺さんだった。

あげようと思ひ返した。

くだんのお爺さんに、

「お金がないと家に帰れないん

でしょう。電車賃はいくらなん

ですか」

と聞いたら、

「家が沼津なんで一千円です」との事。

「そうですか。私があげますか

らこれで帰つて下さい」と言つて二千円を渡した。

「田那さん。ありがとうございます」と言つて、携帯用の傘を差し出した。

「実は、財布を落としてしまいました」

帰りの電車賃がなくなつたん

で、この傘を買つていただけないかと思いまして

と応え別れた。

「お金手にしたお爺さんは何

べんも頭を下げ、雜踏の中に消えて行つた。

「田那さん。ありがとうございます」と言つて、

財布を落として帰る電車賃がないのなら、鉄道公安室か交番に

援けを求めるのが当たり前じや

ないの。第一、君がお金をやつたのに傘を渡してくれないので

変だし、本当にありがたいと思

うなら、後でいただいたお金を

お送りしますから」と言つて、

君の住所を聞くのが常識でしょう。疑いたくはないが、その手

の常習犯にハメられたんじゃないか」との事。

冷静に考えてみれば、友人の

言う通りである。

という事は、彼らのワナにマ

ンマと嵌つたのだ。

善意と思っていたのは私の独りよがりの考え方であり、好んで

災難に飛び込んだ私は、

『天下公認の田舎つべ』

ところが、友人の反応は意外にも厳しかつた。

「東京には、いろいろな手口で

安物を売りつける人が沢山いる

はできないよ。考えてごらん。

財布を落として帰る電車賃がな

いのなら、鉄道公安室か交番に

援けを求めるのが当たり前じや

ないの。第一、君がお金をやつ

たのに傘を渡してくれないので

変だし、本当にありがたいと思

うなら、後でいただいたお金を

お送りしますから」と言つて、

君の住所を聞くのが常識でしょう。疑いたくはないが、その手

の常習犯にハメられたんじゃないか」との事。



古平いろはうた

港町丘はりんごの花盛り

★開拓使から苗木の交付

明治五年、アメリカから輸入されたばかりのリンゴの苗木が、開拓使古平出張所を通じて交付され、出張所側を流れるチヨベタン川上に植え付けられた。このときに交付された苗木の本数や品種名は不明である。

★リンゴの人気が高まる

植えられたリンゴは栽培方法がよく分からなかつたが、栽培を奨励した開拓使からの指導、気候風土が好適であつたことや、豊富な魚肥を使用したことなどが好結果を生み、栽培面積も次第に増えていった。リンゴは食味が良いので需要も多く、輸送にも耐え、長期の貯蔵もきく新しい果実として栽培農家からも歓迎された。

★一大生産地となる

通称・チヨベタンの沢に植えられたリンゴは順調に生育した

ようで、リンゴ栽培の有利なことが知られると、栽培区域はチヨベタン川流域から古平川河口に近い平地一帯に広がり、明治三〇年代には、さらに港町の海岸沿いの丘陵地帯や、丸山の腹辺りにまで広く栽培されるようになつた。

古平町治要覽では栽培面積はないが、収穫量の統計がある。

大正	収 穫	高
7年	92,456貫	346.7トン
8年	79,988貫	299.9
9年	38,960貫	146.1
10年	35,000貫	131.2
11年	14,000貫	52.5
12年	97,000貫	363.7
13年	33,570貫	125.9
14年	94,700貫	355.1
15年	15,990貫	60.0

* 1トン = 266.7kgで換算、小数2桁で4捨5入

★リンゴは帆船で小樽へ
港町に住んでおられたが、お亡くなりになつた浜田ハナさんの談話から。

「小学校を卒業するとすぐに港町の因松岡さんへ奉公した。松岡さんは大きな質屋で、海産商もしていたが、裏山に広いリンゴ畠も持つていた。常雇い(じようき)いがいていつもリンゴ畠の仕事をして、いたが、リンゴの袋掛けや収穫の時期になると大勢の出面が来ていた。収穫したらリンゴは背負いかごで下に運び、倉庫に貯蔵したり、それを荷車に積んで本陣の浜まで運んだりしていた。

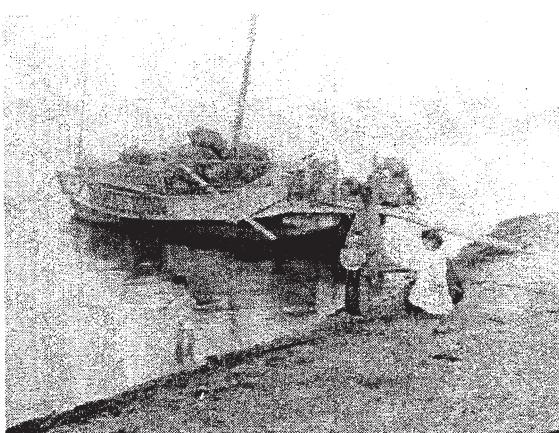
本陣の浜には、合いの子船と呼ばれている弁財船(べぎせん・北船のよし)、車(こし)で運ぶ(運ぶ)に似た船が、余市とか小樽から來ていた。古平のリンゴは、小樽から樺太やシベリア方面へも売られていくつてたという。

ある年、リンゴの積み取りに来ていた船が暴風で難破し、乗つていた二、三人が水死して、リンゴがいっぱい浜に寄つたといふ話も聞いている。」

リンゴのような果樹は、一般的の畠物と違つて特に経験や技術を必要と、片手間では経営できなかつた。豊作だと喜んでいると翌年はその反動で実りが悪かつた。

また大正の中頃、米価が上がったことから水田へ転作するところが増え、平地ではほとんどが水田に変わってしまい、高台や傾斜地などでは畠になつた。

自家用程度に残つていた樹もいつか枯死して、今では以前からのリンゴの樹は全く見ることはない。



中連

泣き笑いの体験記

戦後連

吉野慶一郎

進駐して来た ようやく敗戦最初のソ連人 後の生活にもなんできましたが、最初の頃は不安でいっぱいでした。

なにせ最初に進駐して来たのはあまり素姓の良くない兵隊だったようで、町を歩いていると歩哨や巡回中の丘隊が、時計や万年筆、ライター、たばこなどを取り上げ、中には財布まで奪うという追いはぎが強盗まがいの者までいました。さすがに家までは押し入って来ませんでしたが、どうも最初に来たのはならず者の一団だったようです。

その後進駐して来た部隊は規律も守られ、統制のとれた軍隊という感じで、町民とも大変友好的でした。

一般的のソ連 進駐にともなつて、野田の町に女性上位

ロシア人はロシヤ人は意外にも家庭では奥

も一般のソ連人が大勢入つて来ましたが、労働に男女の区別などは一切ありません。

住居は日本人が出て行つた空き家に入つたりしていましたが、残つているふとんの生地をはぎ取つてカーテンにしたり、着物地を珍しがつていました。

衣類などは不足しているので服装には割とむとんちやくのようで、女性が軍人でもないの者までいました。さすがに家歩哨のように立つています。

また、ロシア人の女性は体质的なか、若い頃はすらつとした体型の人が多いのに三〇歳を過ぎる頃から太るようで、そんな人形もあつて『ロシアのおばさん』と呼んでいました。

ソ連ではスター中でも密告 リン時代から密告が日常化していく、その制裁も容赦ないものでした。この間まで町長をしていたのにワイロ

さんの方がエライようです。ロシア人の漁労長がいましたが、横柄でおまけに酒ぐせも悪く、その漁労長が家にあつた金びょうぶを欲しがつっていました。引き揚げるとても北海道へは持つていけないので、それを家まで持つて行つたところ、居合わせた奥さんが、「(よその家で大事にしている) そうゆうものは要らないから、持つて帰つてください」と言うのです。そして、曰那の胸ぐらをつかまえて叩いたのです。これには少々びっくりしました。

一時期、家に製材工場の主任をしている一家が入りました。が、女性も働くことを義務づけられてるので、奥さんは電話交換手でした。勤務は夜なので曰那さんとは何時もすれ違います。

また、ロシア人の女性は体质的なか、若い頃はすらつとした体型の人が多いのに三〇歳を過ぎる頃から太るようで、そんな人形もあつて『ロシアのおばさん』と呼んでいました。

ソ連ではスター時代から密告が日常化していく、その制裁も容赦ないものでした。この間まで町長をしていたのにワイロ

を貰つたことを密告され、今日は道路工事の人夫として働いているのです。密告することが日常化していく、親しい仲でもなかなか本音を言いません。

あるとき郵便局へ行つたら、おばあさんと局員が「論をしておる。書類に名前を書くのにおばあさんは字が書けない。私も書けないので局員に頼んだら、しぶしぶ書いてくれた。

帰りいつしょになつたおばあさんは「日本人は親切だ」と、うれしそうに言いながら、ウラジオから来たこと、息子はドライブで戦死したので嫁と孫の三人で來たこと、スターリンはサハリンはいいところだと言うので來たが、なーんにもいいところはない。ソ連人は何もしてくれないが、日本人は良くしてくれれる。嫁は浜で働いているが、スターリンはうそつきだ。私は大嫌い! 皆をだましている。下層階級はスターリンの共産主義には不満だ。私たちは働いてただ食べるだけ。いいのは上層階級の人だけだ。そして首をすくめ「ここだけの話——」。

札幌通信 II 第6信

三角形の一辺は近い話

吉川義雄

「三角形の一边は、他の二辺の和より短い」教室でコト新しく習わざとも、子供たちなら誰かが定めた境界や道路を几帳面に通るより、他人に頼着することなく一邊を斜めに通れば、快適な早さで目指す所に着くことぐらいみんな体験している。ただし、これらは独善と他人無視が付きまとうから、どこかの国の人指導者が犯しているよう、時には重大なトラブルもある。

漁師の家は朝が早いから学校を遅刻することなどないが、その日は余程急ぐことがあつたかどうか今にしてわからぬが、この三角形の法則を利用した結果、私の人生の中で一大悲劇ともいうべき事態が待っていた。

三月の初め頃か、まだ一面の雪があつたが、深い雪原ではな

く、家を出るなり道路を無視し

て斜めに進めたからだ。調子にのつて進むうち、ストンと雪原に腰まで落ちて身動きできなくなつた。ことの重大さに気付くのにそれ程時間はかかるなかつた。今では見ることのできない「肥溜め」に見事にはまつたのだった。

詳述する意欲は今もつてないが、当時の少年に着替える学生服も長靴もあるわけはない。学校に行かねば、涙で訴えても通じるわが家ではない。

「ハンカクせえもん」

「臭ッ！ おオー臭ッ」

と、水をぶっかけるだけ。

当時の家には風呂なんか無い

と花を届けて下さった。妙な

きさつから、卒業記念のアルバ

ムに私が絵を描き、そのお礼と

いうことで少しホッとする。

生涯に悲惨な体験は幾度もあ

り、第一、誰からも同情

されることはなく、結果のバカだけが後々までも喧伝された。
おかげで三角形の一边を避け、便利さに変りはないから、極悪とは思いたくなくなる。

一昨年引っ越してきたわが家は、小学校の校庭がよく見える場所。二年近く空家だったから、その間、下校時の子供たちに冒険と便利さは不動だから、近道にしていたらしい。空家に住人が来たとて、三角形の一边に冒険と便利さは不動だから、

聞入者は次々と現れる。

煙の悲鳴を代弁して、大声をあげた当座は少し平穀だつたが、忘れかけた頃、またもワラジ虫みたいに現れる。学校に電話したら、翌日、担任から「母親と子供たちが詫びにお伺いしたい」との連絡。大げさな成り行きに妻が驚き固く辞退した。

小学校の卒業式だつたらしく、家の前に車が止まり、初対面のご婦人がPTAを代表して

法務局の庭に肥溜めは無いよ

うだから、当分の間この行動は続くと思われる。古平の糞尿少

年は、まだまだ健在だ。

確証は無いが、あの越境者がちが卒業したんだと思われ、妙な寂しさを覚える。

ふと気付くと、引っ越して来てから、実は私の方が頻繁に彼等の校庭を侵犯していたのだ。郵便を投函するため、校庭の向こうの道路に赤く佇むポストまでは、こちらと向こうの通用口を通れば易々と用事が足せるから、何度、彼等の遊びの中を通つたことか。

昨年、急に通用口が閉ざされた。遠いどこかの小学校での事件が用心をさせ、ここでもそ

うすることになつたらしい。

三角形の一辺から恩恵を受けた者は、少々のトラブルでは自己反省が希薄になるらしく、次に発見したのが小学校の隣にある法務局の前庭。通用門と正門はまさに三角形の一边。車の出入りも両門どもあるから、訪問者みたいな顔と態度で、数メートルの道程を短くしてポストに通い続けている。

法務局の庭に肥溜めは無いようだから、当分の間この行動は続くと思われる。古平の糞尿少

年は、まだまだ健在だ。

すかさず部屋の隅の方から
「うるせッ！」

卷之三

と、初年兵の声が飛んだ。初年

空氣になつてきた。形勢

ナ。橘、昨日はありがとう
「班長殿お世話になりました」
本当にいい班長だつた。これか
らどこの連隊へ行つても、もうか
こんないい班長には巡り会えな
いだろう。

車した。余市町は、私の故郷古平町のとなり町だ。誰か知つてゐる人でもないかなと、窓から首を出して眺めたが誰もいない。がつかりしていたら娘さん

「これは、あなたがお土産に持つて行くんじゃないですか」「いいんです。もう一袋ありますから……。どうぞ食べてください」

見たか 白アタは何も言
わなくなり、完全に白ア

夕は沈黙してしまつた。

毎日扇引いやがてさ
ま一見るだ。奴を無視し
てやつたことで、日頃の
恨みを晴らしたような愉
快な気分になつた。

翌朝、目を覚ましたら

白父の娘は初年兵の仕返しを恐れてか、自分の荷物をもつてこそこそと居なくなつてしまつた。俺たちに別れの挨拶もなく、どんな野郎だ

竹田班長がやつて来た
札幌の連隊へ行く者と、

秋田の連隊へ行く者に分け、特に札幌に行く私と、本間徳男・山下弘・松谷久美・田中悦蔵・新川・館山の七人には、「元気でやるんだぞ、皆の世話になつた。体には氣をつけて

老兵の綴り方

あゝ権太国境守備隊

-7-

橘義春

りがどうなりました。これか
つても、もうは巡り会えな
札幌まで引率する将
校が迎えに来了。どう
とう竹田班長や班内で
友達になつた佐藤や、
獣医志望という片石た
ちと別れることになつ
た。わずか二か月の付
き合いでたが、一生
涯忘れられない思い出

車した。余市町は、私の故郷古平町のとなり町だ。誰か知つてゐる人でもいないかなと、窓から首を出して眺めたが誰もいない。がつかりしていたら娘さんが一人乗つて來た。座席がなく通路付近に立つてゐる。引率の将校の目がうるさいので、トイレへ行くふりをして娘さんたちの側へ寄り話しかけてみた。

「余市町の方ですか」

「はい、そうです」

「自分は古平町の出身です」「そうですか。私の家はりんご作りをしていますが、古平からは大勢の人が來ています」とのことだ。

「誰か知つてる人でも……」

と、いろいろ名前を挙げてくれたが知つてる人はいなかつた。知り合いでもいたら、私が札幌へ転属になつたこと、そして二元気でやつてゐることを実家に伝えてほしかつたが、残念と少し

「これは、あなたがお土産に持つて行くんじゃないですか」
「いいんです。もう一袋ありますから……。どうぞ食べてください」
「どうもありがとうございます。戦友といつしょにいただきます」

娘さんたちと話しているうちに、小樽駅に到着した。
「どうもありがとうございます。た。お二人ともお元気で、さようなら」

「さよなら。丘隊さんもお元気で頑張ってください」

毎日、男たちの顔ばかり見て暮らしていく、娘さんに接するとかほのぼのとしたものを感じ、感傷的になり、あー、家に帰りたいなーと、里心が脳裏をかすめる

汽車が動き出すと、娘さん一人は一生懸命手を振つて見送つてくれた。彼女たちとは一度と会うこともない行きずりの人かもしだれないが、久し振りに北国人々の、温かい人情にふれたような気分になつた。

話になつた。体には氣をつけて

車に乗った。途中、余市駅で停

ださい

俳句鑑賞

お楽しみコーナー 5

俳誌 惣主宰 水見壽男

編集雑記

俳句のモデル『虹』のこと

3

五月も下旬を迎えると、関東地方はいよいよ梅雨特有の湿りが日常となります。五月二十二日、今朝のニュースで、余市町の林檎園の花さかりの様子が届きました。まるで浮世ばなれした花の満開の山並みは、自然の美しい恵みをリアルタイムで伝えてくれ、懐かしい思いをつのらせました。懐旧の念が胸中いっぱいに広がりました。

さて、引きつづき俳句のモデルについて、記したいと思います。

高浜虚子は沢山の俳句を作ったことは勿論知られており、また俳人として唯一の文化勲章の受賞者です。八十余年の長い生涯で、昭和三十四年四月八日、お釈迦様の誕生日に逝かれましたが、生前多くの文章を執筆しています。虚子俳話、進むべき俳句の道、立子へなどなど。

そして、もう一つ特筆されるのは小説を書いていたことです。虚子は俳誌ホトトギスの経営者であると共に、立派な編集者でもありました。夏目漱石の有名な小説『わが輩は猫である』も、ホトトギスに連載されて誌上を飾りました。加えて『野分』などもそうです。わが輩はは猫である、

の最初のタイトルは、単に『猫』でした。虚子はそれだけではどうも面白くない、というので小説の一節をとつて、『わが輩は猫である』とし、名前はまだない、と文章をつづけました。

併せて虚子は、多くの小説を書きました。風流纏法、続風流纏法などがそれです。そんな中で、古平に何度も来町され、父の鶯の句碑の跋を書かれた伊藤柏翠先生（故人）前日本伝統俳句協会副会長・花鳥主宰・ホトトギス同人）は、有名な虚子の小説『虹』のモデルであり主人公です。

柏翠先生は結核で鎌倉で療養中に俳句の道に入り、虚子の弟子として育てられました。そして、恋人森田愛子と共に師弟の縁を得ました。その森田愛子（福井県三国町）が帰郷して死の床にあり、死を間近としたとき、虚子は愛子に句を贈りました。

虹消えて忽ち君の無きごとし 虚子

の二句です。愛子は地元森田銀行頭取の孫で二十代で夭折しました。鎌倉寿福寺の虚子の谷倉に向いて小さな愛子の墓が建ち、死後も長い絆で結ばれているのです。

▽底冷えのするような中でじっと耐えていた桜が、春の日差しに一気に咲き始めました。真っ先に咲く正隆寺の道路沿いの桜が、何となく色が冴えないと思っていましたが住職さんは「今年は色がいまひとつ……」とのこと。しかし、その後の満開のこと。しかし、その後の満開の町内の桜は色鮮やかで、どこもかしこも花見気分でした。何かの記録にと、町内の桜を片つ端からビデオで撮りました。今から百数十年前、古平を旅した松浦武四郎の紀行文にも丸山の桜を見て、「えみし住むところなれど古平の浦めずらしくさく桜かな」とあります。今では丸山の桜は全く見られないようです。

▽先に編集した『写真で見る古平大火の記録』は思い出すのもいやな大惨事でしたが、過去の記録として罹災された方からも喜ばれました。恐怖の思い出が喜ばれるというのも皮肉なことです。火事への心の戒めとしてご覧いただければ幸いです。

▽6月22日は、言葉の上では夏の真つ盛り『夏至』で、最も日の入りの遅い日。しかし日本では、実際にはこれより七日後が最も遅い日となります。短い夏の始まります。

姫
歌

吉平町岬短歌会

若き日に薯時くと子らを連れゆきし丘見上ぐれば
うぐひす鳴けり

宿の窓開けて親しも海近し波引き濡れし砂浜光る

池田 テル

胴切りにせしを悔やみてゐし桜あまたの新芽天向きて
伸ぶ

孫の好きな枝豆植ゑたく裏畠のせまきに遣り繰りしつつ
畝切る

鈴木 時子

さまざまな緑の芽吹きし裏山に一本白くこぶし花咲く
うぐひすの声に誘はれ花々も競ふがごとく咲き誇る庭

田中 香花

お見舞にいただけし花ガーベラのその朱色に元氣
もらひぬ
室に曲流しぐれし老婦人の「エリーゼのために」に
心和む

黒々と静もる林のうしろより十六夜の月今し登りぬ
久方に沖の灯りの並び見ゆ小女子か鳥賊か大漁祈る
思ひ出す

丹後 初江

ゲレンデの花片栗や雲渡る よしさぎり
母の日やたつた一言ありがたふ 仲谷比呂古
ジヨギングの目を奪はれし初桜 室屋弘子
袋田の滝こそ滝の雄なるべし 越野清治

幸平吟

潮引ひて礁広ごる海苔かき女
子供の日何観て来しや水族館
皆旅に老の留守番子供の日

俳句

吉平俳句会

長閑けしや竿竹売りの声が好 齊藤波留
楚々とした娘の歩み来る雪柳 山口悦子
漁火をうねりの隠す夏の海 越野敏雄
還暦の子の誕生日粽結ふ 大和田絵伊

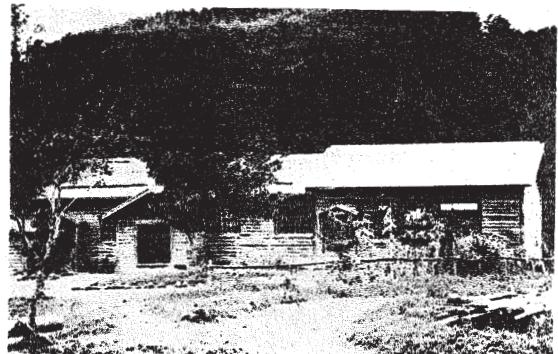
○
俳句の訂正 アンダーラインの個所を削除いたします
春草の萌ひたつ庭の車椅子 大和田絵伊
春草の萌ひたつ庭の車椅子焚く
沖風の和みて来たる春昏る 福井幸平

古平町史年表

14

明治43年（1910）

- ▲小樽支庁が廃止になり、俱知安町に後志支庁が置かれ、以後、現在の行政区域となる。
- ▲鴨居木特別教授所が設立認可され、沢江分教場の解体した材料で校舎を新築する。
- ▲上古平殖民地に新潟団体9戸（タモギタイ）、津軽団体12戸（ロクシナイ）、秋田団体18戸（ヨシヤチ）が入植し、開墾に従事する。
- ▲帝国在郷軍人会古平町分会が設立され、古平報国会が解散する。分会長陸軍歩兵少尉小町勝治
- ▲沖村で風呂の不始末から出火し27戸を焼失する。



泥の木分教場（大正年代）

明治44年（1911）

- ▲古平郵便局が電話交換業務を開始する。加入数は46台
- ▲正隆寺から出火し石倉を残して焼失し、同年再建される。
- ▲浜町寺の沢の山林から出火し、折からの強風で歌棄村では3戸を焼失、ほかに納屋掛け中の鮫も全部焼失する。
- ▲私設消防組を組織し、町の防災や警備に貢献した仏師・佐藤傳作の記念碑を消防組が禪源寺境内に建立する。
- ▲北海道庁令により、町内に東部、西部、歌棄・沖の3つの火災予防組合が設立される。



佐藤傳作記念碑

明治45年（1912）

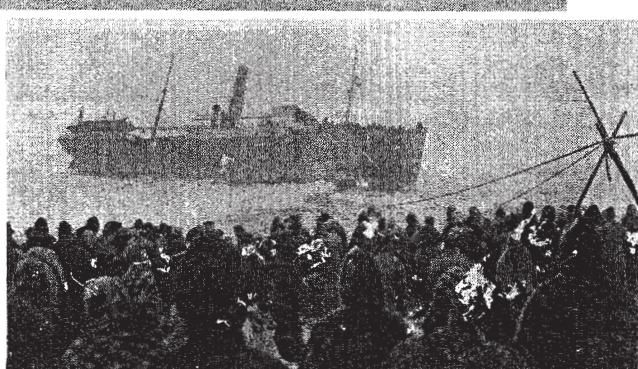
- ▲樺太への出稼ぎ漁夫を乗せ、漁場への物資を積んで渾内に停泊中の汽船第二出羽丸が、いかり綱が切れて漂流し恵比須神社下の磯に座礁した。住民が必死の救助活動に当ったが乗客2名が死亡する。後に、救助された乗客の遺族らによって、巖島神社境内に記念碑が建立された。



第一出羽丸の遭難

大正元年（1912）

- ▲米の作付け面積が3反（900坪）、収穫高4石（600キログラム）であった。

大正2年（1913）

- ▲火災2件が発生し、3人が焼死する。
群来村（3棟全焼、原因不明）・丸山町（3棟全焼、子供3人焼死、子供のマッチの火遊びが原因）